

Japanese Literature — 46



北 吉
行 淳
淳 之
之 介
杜 夫
夫 集



現代日本の文

46

現代日本の文学

吉行淳之介集
北 杜 夫

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島 由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜 夫

(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

46

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

吉行淳之介 集
北 杜夫

昭和45年8月1日 初版発行

昭和48年2月1日 十版発行

著者 吉行淳之介
北 杜夫

発行者 古岡秀

発行者 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-44

郵便番号 145 振替東京 4290

電話 東京(720)1111 (大代)

印刷 大日本印刷株式会社

暁印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
本書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学
電話は、東京(03)720-1111 内線352,353か、東京
727-1600へお願いします。

© 1970 Printed in Japan

0393-164 646 1002

吉行淳之介文学紀行

横浜港と山下公園

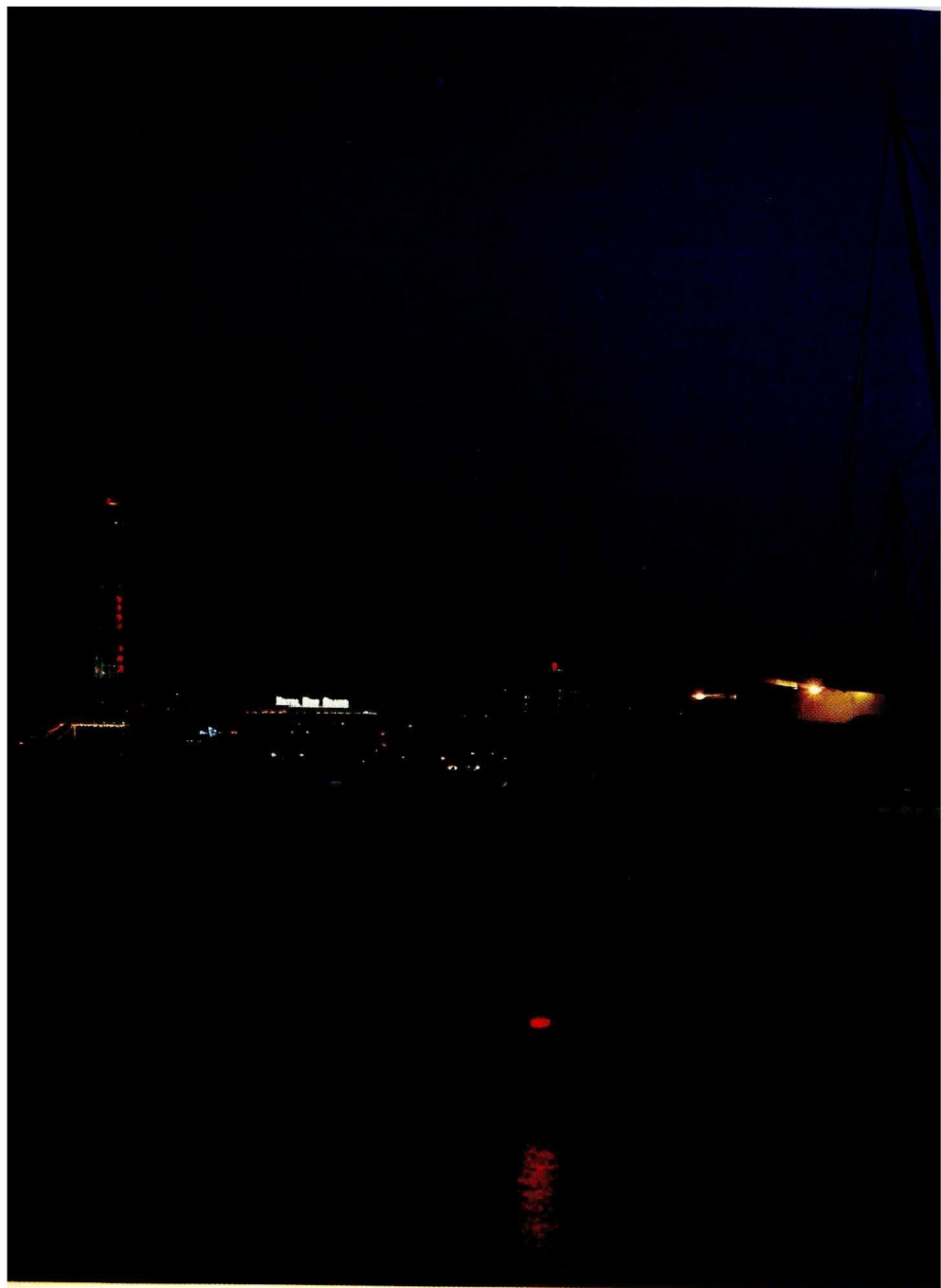


港の傍に、水に沿って細長い形に拡がっている公園がある。その公園の鉄製ベンチに腰をおろして、海を眺めている男があった。

〔砂の上の植物群〕

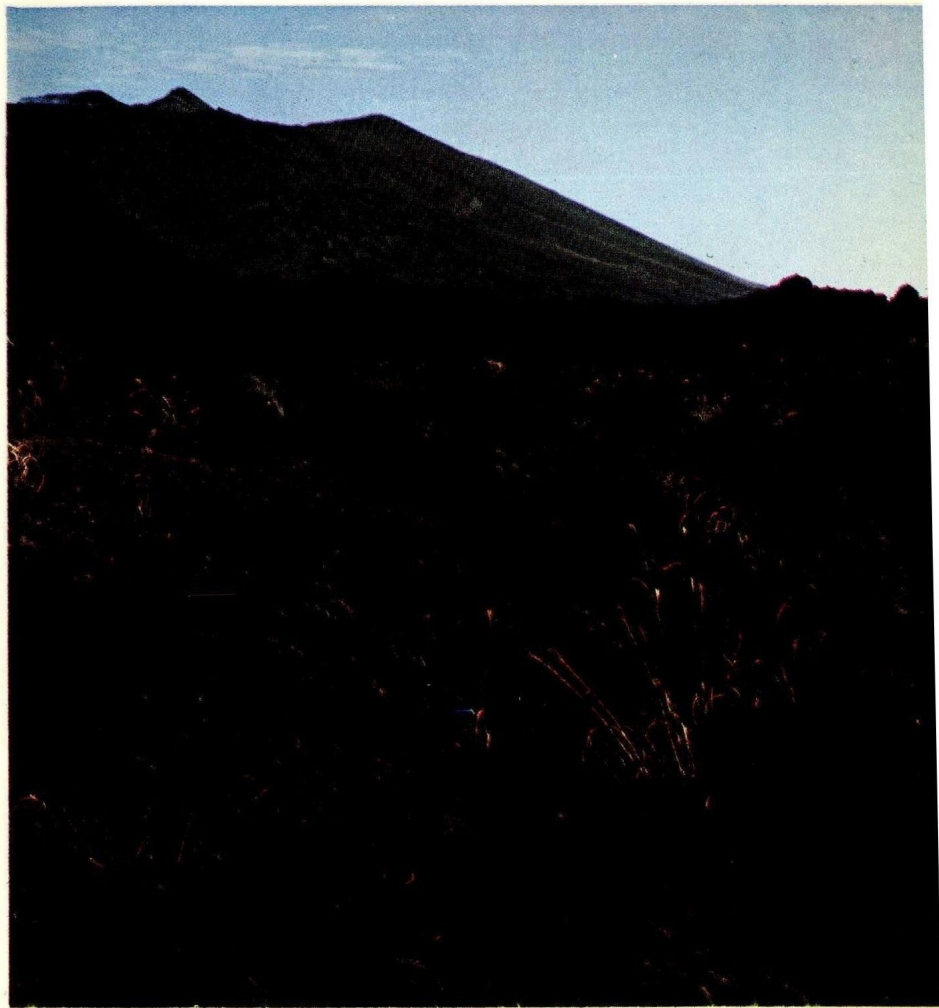


横浜港の夜景



塔を昇っているあいだに、あたりは夜になっていた。ガラス張りの円型展望台の四辺には、夜景が拡がっている。港は暗く、せんばし棧橋と貨物船の燈火が、黒と灰色の底で光っていた。

(「砂の上の植物群」)



砂漠には、あちこち溶岩が黒い
尖端をのぞかせていた。

砂漠を横切って、向う側でラク
ダを下りる。歩いてゆくと斜面
が急に勾配を烈しくして、その
尽きるところが火口である。

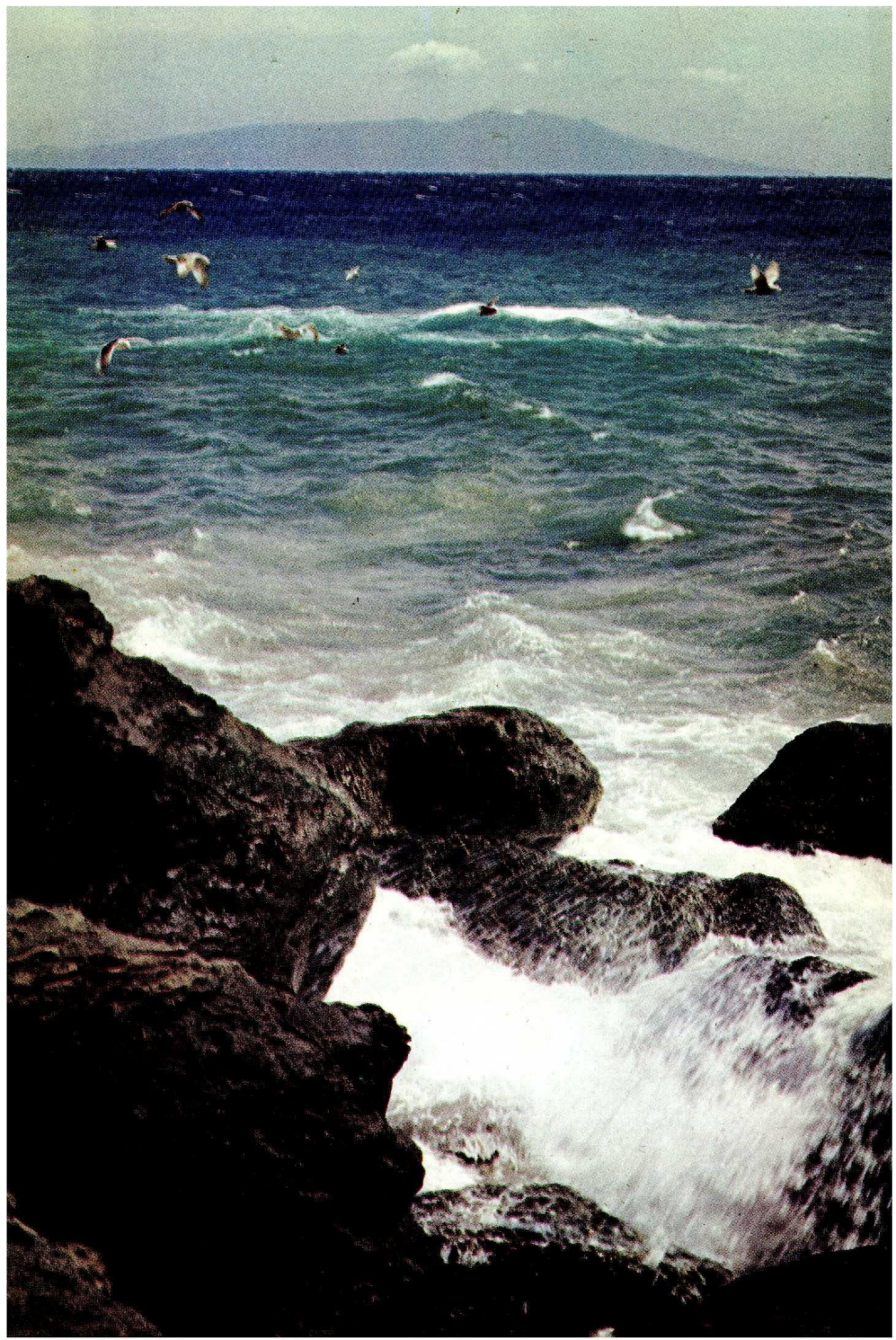
(「夏の休暇」)

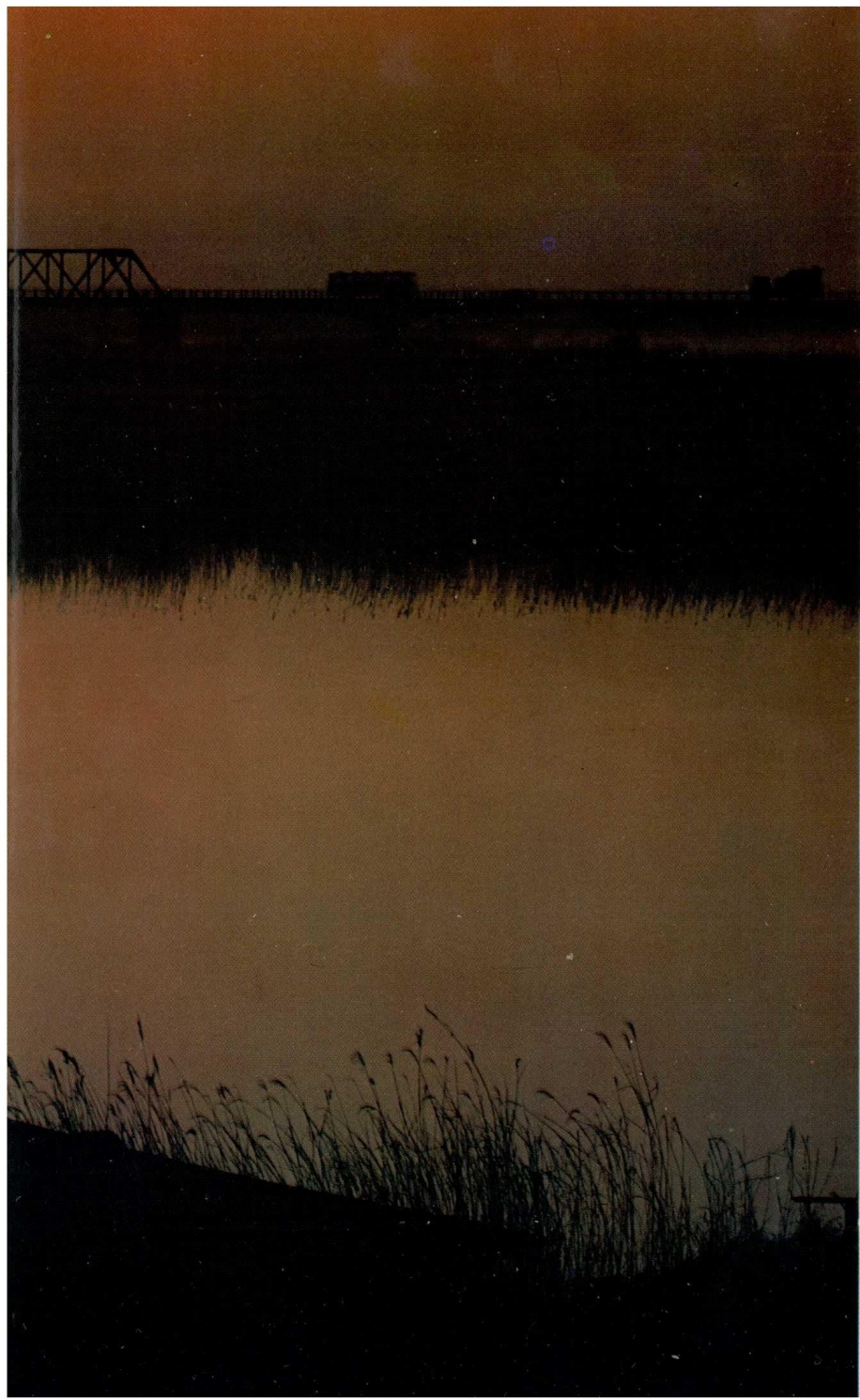
大島・三原山

一郎は、黙って海を眺めていた。
やがて、パンツ一枚の父の姿が、
広い背中を見せて海に歩いて行
った。白い飛沫を蹴立てて水に
飛びこむと、鮮やかな抜手を切
って泳ぎはじめた。大きな波を、
巧みに乗越えながら、どこまで
も沖に向って進んでいった。

(「夏の休暇」)

伊豆熱川の海・前方は大島



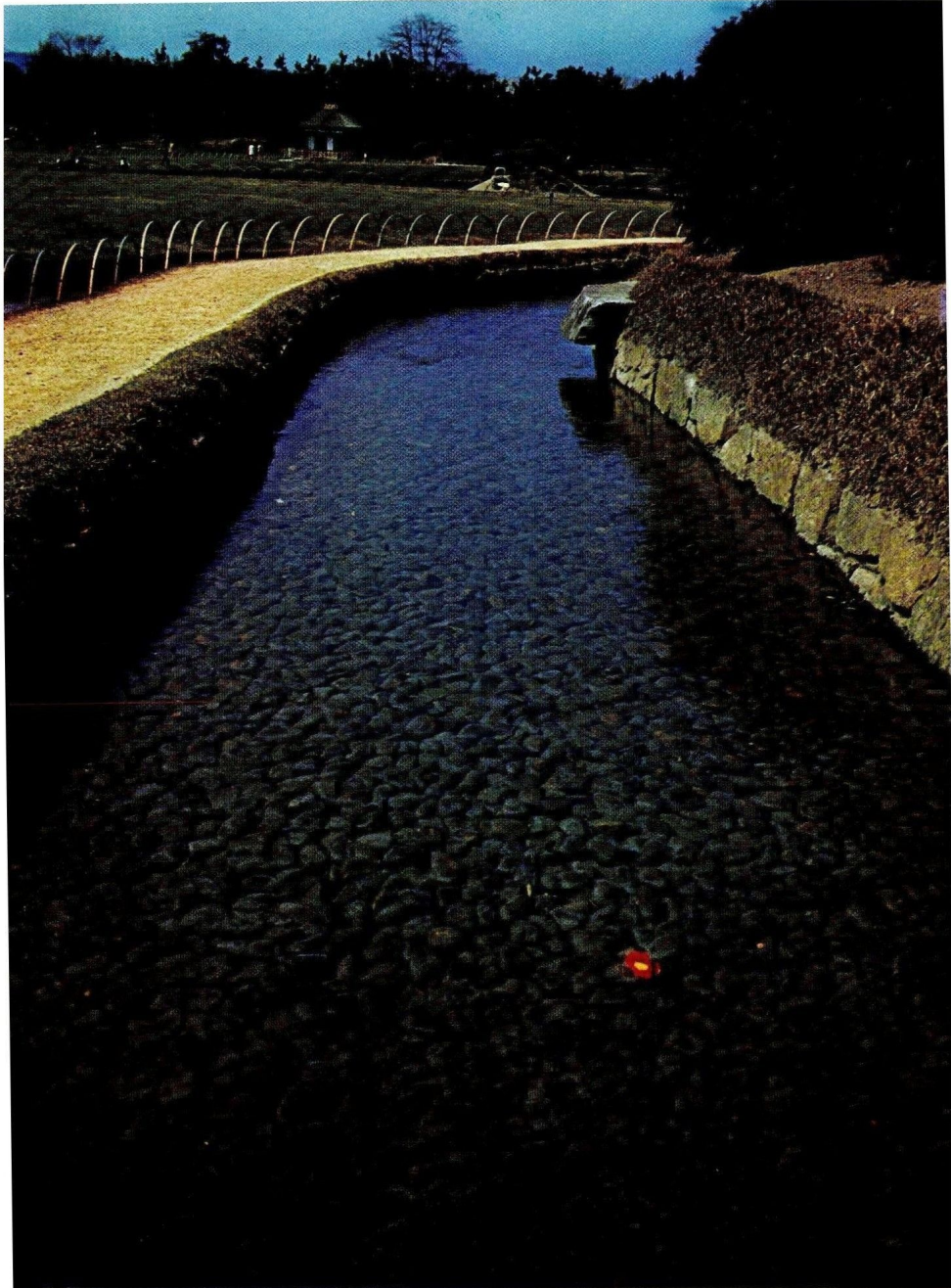


利根川と水郷大橋



田舎の駅のプラットホームからも、やはり丁川の水は見えなかった。しかし、丁川の岸に舫つてある船の帆柱や煙突だけが並んで見えていた。あの病院へ戻ったら、今度こそ湖のように広い丁川を見に出掛けよう、と彼は心に言い置きかせていた。

（「水の畔り」）



公園に、歩み込んだ。みどり色の芝生が、大きくひろがっていた。
芝生の中の路は、埃ほこりばかりだった。(「童謡」)

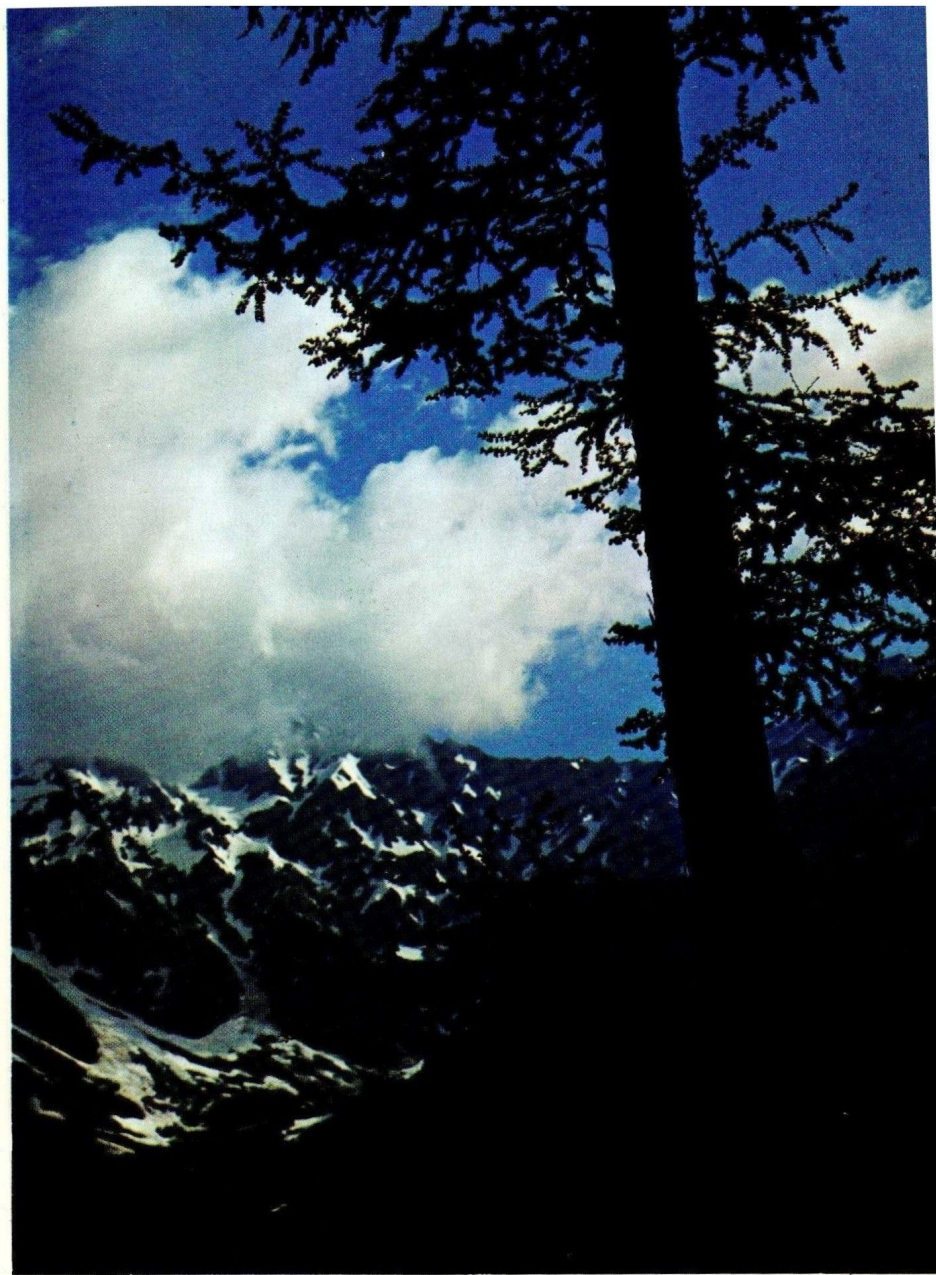
岡山・後楽園

北杜夫文学紀行

松本市と北アルプスを望む



その背後には、美^{うつく}が原とよばれる高原がゆるやかな起伏をみせて続き、そして僕の登ってきた方向には、松本平の盆地をはさんで、はるかに波濤^{なみ}のようにつらなっている北アルプスの山脈^{さんみづ}が望まれた。
(「幽霊」)

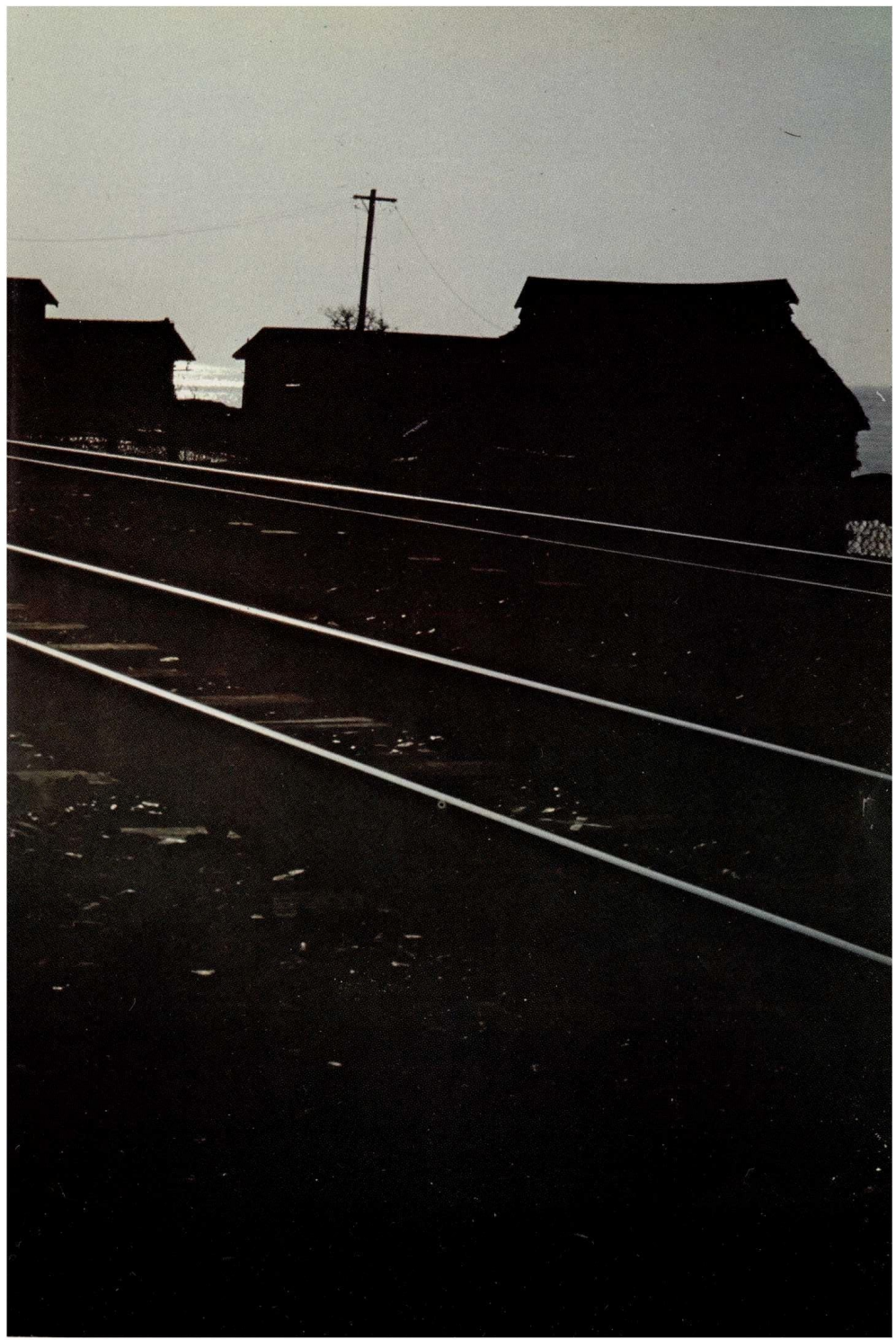


牧場の芝が萌え、つつじの蕾がふくらみだすと、すでにさわやかな初夏の風が梢をわたるようになる。（「幽霊」）

長野県・三城牧場と王ガ鼻付近

上高地より穂高を望む
（「どくとるマンボウ昆虫記」）







それはまったく目的のない気ままな旅であった。はじめ北陸のほうに向かって汽車に乗ったが、気がむけばどんな辺鄙な駅であっても途中で下車をし、ふたたび当てずっぽうに出発した。こうした旅のみが、僕の生いたちに、僕自体に、このうえなく似つかわしいものと思われた。(「幽霊」)

日本海に沿って走る北陸本線

